



武蔵野

埼玉大学図書館

2013年2月18日 13号



図書館と私

目次

| | |
|---|----------|
| 図書館を「主体的な学び」の場に..... | 坂西友秀(1) |
| 図書館の思い出..... | 関口聡美(4) |
| 古書の街 神保町にて..... | 岩崎真美(6) |
| けやきの窓:絵本と私～読み聞かせの実践から～..... | 内田浩子(7) |
| 児童書とステレオタイプ・偏見..... | 坂西友秀(9) |
| 第2回・第3回図書館会議報告..... | (15) |
| 図書館からのお知らせとお願いー①新入館システム, ②図書返却のお願い..... | (16) |

図書館と私

図書館を「主体的な学び」の場に

はじめに 1月17日、神戸市中央区の「東遊園地」では多くの市民が、「1.17」・「3.11」の形に並べた蠟燭と灯籠を前に、二つの震災（阪神淡路大震災，東日本大震災）の犠牲者を追悼しました⁽¹⁾。この場をお借りして、亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。

東日本大震災・福島第一原子力発電所（以下原発）炉心熔融事故から2年が経とうとしています。一見平穏な世界を取り戻したかに思える私たちの日常ですが、今改めて足下を見つめ直すことが必要でしょう。多くの被災者が、今だに仮設住宅に暮らしています。復興に焦点を当てた番組や報道（NHKスペシャル「東日本大震災シリーズ」もその一つでし

う）が多いことは、震災・原発事故が長期にわたる厳しい重しであることを物語っています。福島原発に近い双葉町は、埼玉県加須市に避難したままです。住民の村への帰還目標は30年後といえます⁽²⁾。地域全体を根こそぎさらった地震・津波と共に、原発事故の放射能汚染は、異次元のさらなる「深刻な」被害を及ぼし続けています。

ステレオタイプ 事態を「深刻」と受け止めるか否かは、人により異なります。リップマンは、「世論」⁽³⁾の形成過程に注目し、一要因として「ステレオタイプ」が果たす役割を重視しました。私たちは、社会的現実や事象を把握し理解するとき、それらを各自の頭の中に作られた既

成の固定観念や先入観（ステレオタイプと呼ぶ）の「鋳型」に当てはめると彼は指摘します。「ステレオタイプが無批判に受け入れられると、配慮されなければならない多くのことがふるい落とされてしまう」と警告します(3)。ステレオタイプの弊害を減じる方途として、科学的な態度と思考の重要性をあげています。

ステレオタイプは、現実を客観的に「ありのまま」見ることを困難にし、この歪みが世論に反映されるのです。毎日新聞が行った世論調査では、「原発ゼロ見直」に賛成の人が56%以上います(4)。この結果は、原発事故を「深刻ではない」とする世論を反映しているのかもしれませんが。リップマン流に言えば、この「否深刻」の観念も一種の「ステレオタイプ」と考えられます。

事実在即して考える 冷静に現実を見れば「深刻な」事態にあることは明らかです。埼玉県の「月間の定時降下物」の放射能測定では、今も放射性物質が検出されています。水道水も複数月の累積検査では、同様の結果です。海産物・農産物からの検出も然りです。注意すべきは、放射性物質が人工的に作り出される以前は、これらの物質は検出されていないことです。多くの検査結果は、暫定的な基準値（水10Bq/kg、一般食品100Bq/kg、等）を下回ると「ND（不検出）」と表示されるにすぎません。各種の放射性物質が、食品、製品、資材、材料に多かれ少なかれ含まれているという、異常な事態が継続しているのです。

放射能による健康被害に不安を持つ人は、潜在的には少なくありません(5)。原発事故当時の初期被曝を受けた範囲と程度は不明のままです。被曝の影響はどのような形でどのくらいの期間で現れるのかも知らされていません。放射能が、遺伝子レベルの被害・傷害を引き起こす

ことが、他の自然災害と異質であり、ある意味人間にとって致命的ともいえません。このことが、大きな不安を生む重要な要因の一つになっています。

民間組織や団体が自発的に土壌・食品の検査を行い、汚染の実態が徐々に明らかになってきました。福島県に限らず、高濃度に汚染された地域は多く、チェルノブイリ原発事故の避難区域に相当する汚染も指摘されています(6)(7)。汚染物質の集積と使用済み核燃料処理不能問題(8)、初期被曝、疾病罹患と発病への不安など、難題が山積しています。今、私たちに求められることは、ひとり一人が、ステレオタイプを脱し事実在即した思考をし、現実を検証していくことです。これこそが、今大学改革で重視される「主体的に学び、問題を解決する力」(9)につながるのではないのでしょうか。

図書館は「学び」の場 「主体的な学び」に適した場が、図書館です。あらゆるものが電子情報化され、図書館の様相も大きく変化してきました。小型の携帯電子媒体・機器が普及し、いつでもどこでもだれでも必要な情報を入手できるようになりました。娯楽・趣味から専門的研究に至るまで分野を問いません。「米国はテキサス州サンアントニオに新たにオープンする公共図書館 Biblio Tech には、紙の本がありません」(10)。「紙の本」のない図書館が出現する時代です。図書館のありようもさらに変化していくでしょう。それでも図書館が、多様な情報の宝庫であることには変わりありません。とりわけ、大学図書館は、世界の最先端の研究情報を提供し、教職員・学生・市民のみなさんの研究・教育・知的活動を支える重要な役割を果たしています。図書館は、「宝の山」です。大学間の連携・協力が進み、本学の図書館にない資料・書籍も、相互貸借制度を利用し

て所蔵館から取り寄せができます。利用者のみなさんの自主的、主体的な探求に、独創的創造的活動に図書館を大いに利用していただきたいと思います。

今大学改革が進められています(7)。世界が狭くなり、地球規模で社会が激しく変化する今日、大学教育の再構築と新たな機能が私たち求められているのです。特に重視される大学の機能・役割に「主体的に学び・考え行動する人材の育成」があげられています。「自ら学び考え、どんな状況にも対応できる能力の育成」を大学に要請しているということです。「学修時間を実質的に増やし、『答えのない問題』を発見し、最善解を導くために必要な専門的知識及び汎用的能力を鍛えること、実習や体験活動などの教育によって知的な基礎に裏付けられた技術や技能を身に付けること」で、大学教育の質的転換を図ろうとしています。図書館をみなさんの身近な学びの場としてご利用いただきたいと思います。

内容紹介 本号は「図書館と私」と題してみました。関口聡美さん(テレビ埼玉)には、図書館にまつわご自身のエピソードをエッセイ風にご紹介いただきました。私たちにも馴染みのある本を例に、図書館との関わりの楽しさを語りかけています。絵本「すてきな三にんぐみ」、「アドルフに告ぐ」、「君たちはどう生きるか」、「ライ麦畑でつかまえて」、いずれも広く愛読され、多くの方が手にしたことのある本でしょう。みなさんの思い出と重なり、なつかしい日々がよみがえることでしょう。岩崎真美さん(図書館図書資料係)は、神田の古書店街の魅力をレポートしてくださいました。古本まつりに足を運ばれたことのある方は多いと思います。かつてに比べ古書店の数は少なくなりましたが、神田ならではの「掘り出し物」を見つける喜びは今も健在で

しょう。内田浩子さん(教育学研究科院生・教員)には、子どもにとって本が持つ意味について、ご自身の活動をもとにご寄稿いただきました。内田さんは、「読み聞かせ」を行っています。絵本の持つ魅力と奥深さを、「読み聞かせ」を通じた子どもとのふれあいの中から教えてくれます。また「学校図書館司書」の仕事もされ、「子どもたちが利用したくなる図書室」を目指し、環境整備に努めているそうです。司書教諭の視点からも子どもと本の関わりを意識して過ごされています。最後に、世界中で親しまれてきた児童書を例に、先入観・固定観念が如何に気づかれにくく、人々の間に広汎に深く定着するものか、「人種ステレオタイプ」に焦点を当てて拙稿で試行的に考察してみたいと思います。

引用文献

- (1) NHK NEWS WEB 2013年1月17日 阪神淡路大震災18年 犠牲者追悼 (<http://www3.nhk.or.jp/news/html/20130117/k10014869641000.html>)
- (2) NHK NEWS WEB 2013年1月4日 双葉町長 “住民の帰還目標は30年後” (<http://www3.nhk.or.jp/news/html/20130104/t10014580401000.html>)
- (3) Walter Lippmann (1922) Public Opinion (W.リップマン 1987 世論上 掛川トミ子訳 岩波書店 p.153)
- (4) 毎日新聞 2月3日 原発ゼロ見直し…56%支持 (<http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20130203-00000051-mai-pol>)
- (5) NHK 2013年1月12日 NHKスペシャル: 空白の初期被爆-消えたヨウソ131を追う
- (6) 常総生活協同組合 2012年9月24日放射能への取り組み -土壌沈着調査結果 (http://www.coop-joso.jp/radioactivity/result_soil.html)
- (7) おしどりマコ (2012) ベラルーシ、ベルラド研究所所長福島を初視察 DAYS JAPAN Vol.9 NO.13 pp.10-11.
- (8) NHK 2012年2月10日 NHKスペシャル 核のゴミはどこへー検証・使用済み核燃料ー

(9) 板東久美子(文部省高等教育局) 2013年1月26日 教員養成フォーラム「教員養成の改革に向けて」 横浜国立大学教育人間科学部附属教育デザインセンター

(10) GIZMODO 2013年1月11日 ついに、紙の本を1冊も置いていない図書館がオープン (http://www.gizmodo.jp/2013/01/1_117.html)

(図書館長 坂西友秀)

図書館の思い出

関口聡美

(テレビ埼玉 総務経理部)

私は現在、埼玉県立図書館協議会委員をしています。日常の仕事は図書館業務とは関係がありませんので、会議には全くの素人として参加せざるを得ず、毎回冷や汗をかきつつ出席しております。

そんな私ではありますが、生来の本好きの為、子供の頃から現在に至るまで、図書館には足繁く通っています。今回は、そうした図書館や、今まで読んできた本にまつわる思い出を書いてみたいと思います。

保育園の頃、保母さんが読み聞かせてくれた面白い本や紙芝居のことは、今でも覚えています。当時、私も含めた保育園児達に人気があったのは「すてきな三にんぐみ」という絵本です。3人の強盗が小さな女の子を誘拐するという物騒な物語にもかかわらず子供の人気を集めたのは、面白いストーリー展開と、ユニークな挿絵の為でした。今でも図書館で見かけることがありますから、意外にもロングセラーなのかもしれません。



トミー・ウンゲラー
(1983:偕成社)



手塚治[※]
(1985:文藝春秋)



吉野源三郎
(1982:岩波書店)

高校の図書室には、司書教諭の先生がいました。冬休みに入る前に、何巻もあるシリーズ物の本を借りようとした時、その先生は貸し出し冊数の制限を大目に見てくれました。先生のお陰で冬休み中に読破できたその本は、その後全巻購入したほどのお気に入りになりました。ハ

ードカバーで「本」の体裁をしてはいましたが、「アドルフに告ぐ」という手塚治虫の漫画でした。

また、その先生が読書を勧めてくれた本があります。「君たちはどう生きるか」という岩波文庫の本でした。タイトルからしてお堅い上に岩波文庫ときは、高

校生が読みたいとは思わない本でしたが、先生が言うならと読んでみました。読み始めると、第一印象を覆す面白さで、あっという間に読んでしまいました。また、その内容の素晴らしさにも感動しました。若い方には特にお勧めしたい本です。

大学入学を目前に控えた春休み。時間があつたのでのんびり読書でも、と思って手に取ったのが「ライ麦畑でつかまえて」でした。



ジェローム・デーヴィッド・サリンジャー
(1984:白水社)

誰知らぬ人のない世界的な大ベストセラーであり、もはや古典とも言えるほどの作品ですが、当時の私は何も知らず、いわば「ジャケ買い」状態。タイトルの響きと表紙に惹かれたのです（後で知りましたが表紙の絵はピカソの素描きでした）。

読後感は一言では言えないものがありました。毒が回ったという感じで、この毒が抜けきるまで、かなりの年数を必要とした気がします。共感していただける方はいらっしゃるでしょうか。

大学では、総合図書館の地下2階が私のお気に入りの場所でした。そこには手塚漫画がほとんど収められていたからです。

私が唯一持っているクレジットカードはこの大学のカードですが、その理由はこのカードが大学図書館の入館証を兼ね

ているからです。社会人になったばかりの頃は、このカードを使ってよく入館し、手塚漫画を読んでいましたが、今は多忙を理由に足が遠のいています。

現在、私が通っている図書館は近くの公立図書館です。この図書館はリニューアルしたばかりで綺麗で大きく、設備も今まで私が通った図書館の中では最先端と言えるほどです。

何よりも私が評価する点は、貸出、返却に図書館スタッフの人手を煩わせずに済むことです。機械による自動貸出、自動返却のシステムが整っているのです。

高校生の頃、よく利用していた別の公立図書館で本を借りようとした時、貸出係の人に「こんな本を読んで面白いのか」という主旨のことを言われて、嫌な思いをした事があったので、このシステムが出来た時には、本当にうれしく思いました。



視聴覚コーナー「踊る人」(関口, 2013)

しかしながら、この図書館にも残念なところがあります。マナーの直しくない一部の利用者がいることです。走り回る子供でもなく、高いびきで居眠りを貪る人でもない。それは、踊る人です。視聴覚コーナーで、ヘッドホンを付けて

踊っています。声は出ていませんが、多分、歌も歌っています。口を開けたり閉じたりしています。声を出すことを憚る気持ちはあっても、踊ることを遠慮する気配はありません。不思議な光景です。

本や作品、作家について語り合った時、その人の思わぬ一面を発見できることがあります。そんな貴重な機会を逃さぬ為にも、これからも色々な図書館へ足を運び、様々な本を読んでいきたいと思います。

掲載写真

ジェローム・デーヴィッド・サリンジャー
1984 ライ麦畑でつかまえて (野崎孝訳)
白水社

手塚治虫* 1985 アドルフに告ぐ 文藝春秋
トミー・ウングラー 1983 すてきな三人組
(今江祥智訳) 偕成社

吉野源三郎 1982 君たちはどう生きるか 岩波書店

(各出版社及び(*印は)手塚プロダクションから本表紙の写真掲載を許諾していただいています)

古書の街 神保町にて

岩崎真美

(図書館図書資料係)

2012年11月3日、文化の日。およそ1週間にわたって開催された「第53回 東京名物神田古本まつり」最終日ということ

もあり、歩道には直進できないほどの人だかりができていた(写真1)。その人数を優に凌駕する本、本、本…。



写真1 本、本、本…人、人、人…
(岩崎, 2012)



写真2 東京名物神田古本まつり
(岩崎, 2012)

言わずと知れた古本の街、神保町。埼玉大学からはバス、電車を乗り継いで1時間あまりの都心に位置する。普段は私

達図書館員が研修等で訪れる国立情報学研究所は、写真2の交差点から歩いて5分ほどのところにある。全国の大学図書館

と密接に関連し、情報学の最先端を司る機関のほど近くに、日本随一の古書店街が軒を連ねるといふ不思議。出版社もひしめくこの界隈で世に出されたかもしれない本が、一旦誰かの手に渡り、再びここに還ってくる。

直射日光の当たらない側にはほぼ密集している古書店。店内に収まりきらず普段から外にはみ出している本という本が、まつりの期間中には車道ぎりぎりまで迫る。毎朝背ラベルを頼りに書架整理をする大学図書館の、秩序だった並びとは趣を異にする、圧倒的な量の本たち。横に積み重ねられたり、定価とはかけ離れた値札がつけられたりすることによって、ここでの本と人との出会い方は、足と勘と経験によると言っても過言ではないだろう。

人同士であれば対立を招きかねない相反する思想が、本同士では競い合うことなく、それでも装丁やタイトルにその個

性を映して隣り合うことができる。ジャンルに囚われることなく並べられた本同士の、思いもよらない共通点を発見できる。趣味・熱中・没頭…といった単語が似合うこの街にいと、本に自分を試される思いがする。

それぞれの店主によって蒐集・蓄積された本に触れると、大学図書館で日々携わる収集・整理・保存、そして利用に供するといった業務とは違う見地を得る。本そのものに、それぞれが辿ってきた物語があるように感じられる。そして、私達が何かに打ち込むきっかけとなる一冊に出会うまでの道のりには、無駄なものなど何一つないと気づかせてくれる。

一介の図書館員として、大学図書館でどのようなお手伝いができるのだろうと、自問自答する日々を過ごして早2年。明日もまた、できることから取り組んでいく所存である。



絵本と私 —読み聞かせの実践から—

内田浩子

(埼玉大学大学院教育学研究科 臨床心理コース：院生・教員)

はじめに 私は、現在埼玉県の派遣教員として、埼玉大学大学院で学んでいる小学校の教員です。

絵本とは 「絵」と「言葉」によって、一つの世界を描いているのが絵本です。中には、「絵」のみで文字のないものもあります。たとえ文字がなくてもストーリーがあり、読み手に豊かに語りかけてきます。絵本の世界を通して、愛、憎悪、生、死、成功、失敗、善、悪、安心、恐怖などに触れることができます。つまり、絵本

は読み手の想像力を刺激し、思いを膨らませてくれるという魅力があるのです。

絵本の読み聞かせを始めたきっかけ 教員生活3年目のことでした。ボランティアで絵本の読み聞かせをしているという保護者に出会い、「絵本の魅力」を再確認しました。それ以来、私は学校の図書室によく足を運ぶようになりました。そして、たくさんの絵本に出会いました（いろいろな絵本1, 2, 3, 内田, 2013）。大人である私が読んでも絵本は味わい深いものです。そこで、この感動を子どもたちと共有したいという気持ちが高まり、「教室での読み聞かせ」を始めました。



いろいろな絵本1（内田, 2013） いろいろな絵本2（内田, 2013） いろいろな絵本3（内田, 2013）

読み聞かせの取り組み 朝の読書タイム、掃除終了後、帰りの会などを利用して、一週間に二回以上を目標に、読み聞かせを続けています。

取り組み始めた頃は、「毎日の読み聞かせ」を目標にしていました。しかし、授業の準備や生活指導など日々時間に追われ、「毎日」というのは容易なことではありませんでした。そのため、いつしか読み聞かせの時間を捻出することに必死になり、上辺だけの読み聞かせになってしまいました。そんな自分に気づいた時、「少なくとも一週間に二回は、子どもたちと絵本の世界に浸る」という目標に変更しました。

読み聞かせが定着した現在では、私にとっても、学校生活の中で子どもたちと心を通わせることのできる楽しい時間の一つになっています。

読み聞かせを続ける理由・読み聞かせのよさ 私が絵本を読み始めると、子どもたちは身を乗り出し、ドングリ眼で聞き入ります。「絵」を見ながら様々な「言葉」を聞きます。「見る」と「聞く」の作業が同時進行することで、子どもたちは想像を膨らませ、絵本の世界に浸っていきます。それは、読み聞かせの最中の子どもたちの表情や読み終えた後の様子を見れば一目瞭然です。また、互いに言葉を交わしたわけではないのに、読み手である私の心と聞き手である子どもたちの心、そして一緒に聞いている子どもたち同士の心が一つにつながったような、空気に包まれます。それはきっと、現実の世界とは違った絵本の世界を共に味わい、その世界に共に浸ることができたからこそ生まれる空気なのだと思います。教室での読み聞かせは、「1対1」ではなく「1対多」であり、みんなと一緒に一つの世界に触れるという楽しさや、聞き手同士の心をつなぐ力をもっているのです。

私は、どの学年を担当しても読み聞かせを行っています。低学年に読み聞かせをした時の反応は、本当に素直でかわいらしいです。中学年になってくると少し照れが入ってくるのですが、それも初めのうちだけ。読み聞かせを続けていくと、低学年に負けないほど絵本に浸っていきます。さて、高学年の反応ですが、読み初めのころは、「絵本かよ。」と少々馬鹿にした様子を見せます。しかし、何回か読み聞かせを繰り返すうちに、いつしか絵本の魅力に気づき、絵本を楽しむようになります。そして、子どもたちは驚くほど絵本

の世界のイメージを広げていきます。つまり、いくつになっても同じ、絵本は人の心を魅了するということです。

私はどうも涙腺が弱く、読み聞かせをしながら涙ぐんでしまうことがあります。どうやら物語にのめり込み過ぎてしまうようです。読み聞かせを始めたばかりの頃は、読み手が感情移入し過ぎるのはあまり良くないのではと思っていました。しかし、6年生を担当した時、その思いはなくなりました。ある日、私は、読み聞かせをしながら声を詰まらせ泣いてしまったのです。「まずい！子どもたちに笑われる！」と思った私は、絵本から子どもたちにそっと視線を移しました。そして、はっとしました。子どもたちの表情はとても真剣で、男の子も女の子も目に涙を浮かべていたのです。読み終わった後、子どもたちは黙って拍手をし、みんな無言で自分の席に戻っていきました。自分なりに考え、感じていたのでしょうか。絵本の世界に浸っていたのでしょうか。余韻に浸っていたのでしょうか。その瞬間、「ああ、これだ。これでいいのだ。」と実感したのです。たとえ読み手の感情が表に出すぎてしまったとしても、聞き手がそれぞれに受け取り、絵本の情景を思い描いたり、登場人物の気持ちに寄り添ったりすることができるのだと実感したのです。

終わりに 私は、教員として子どもたちと関わり続ける限り、これからも「絵本の読み聞かせ」を続けていきたいと思います。そして、子どもたちと共にこれからもずっと心を耕し続けていきたいと思います。

これから教師になれるみなさん、よかったら絵本を手にとってみてください。そして、学級で絵本の読み聞かせをしてみませんか。きっと、そこから多くのことを得られると思います。みなさんには、これから忙しい日々がやってくるでしょう。そんな時だからこそ、子どもたちと一緒に絵本を通して、ほんのひと時、忙しい現実から離れてみてはいかがでしょうか。

児童書と人種ステレオタイプ・偏見

(教育学部・坂西友秀)

はじめに 私たちが一人の人間として生きる基盤は、文化であり世界観です。喜怒哀楽、言語・思考、感情、情緒、行動様式、すべてが文化の所産であり、世界観に深く関わるものです。文化・世界観が、私たちを「人間」たらしめているともいえます。文化・世界観はまさに水であり空気であり、私たちを社会的な存在として機能させる土台です。しかし、その一方で、特定の文化や世界観が他方と対立し、軋轢が生じ争いが起こることも少なくありません。優勢な文化・世界観が、他を抑圧し支配してしまうこともあります。古くからある「人種」的偏見・差別は、文化と世界観に関わる問題といえるでしょう。

自らの文化・世界観を私たちが意識することはまれでしょう。異なる社会との接触が、他の文化・世界観と自己の文化・世界観の存在に気づかせる契機になります。いかに優れた科学者、知識人、作家・作家であろうと、一つの文化・世界観に浸りきるとき、自分の文化・世界観を

客観化し対象化して見つめ、その特徴、長所や欠点に気づき、自覚することは困難になります。こうした既成の固定観念や先入観をリップマンは、ステレオタイプと呼びました。ステレオタイプは、偏見・差別に結びつきやすく、回避することは容易ではないと言われてきました。

ここでは、世界中で広く愛読されてきた児童書(子ども向けの本)をとり上げ、私たちが「時代の潮流」・「世界観」にいかにか強く影響されているかを検討してみたいと思います。

まず、「人種」デフォルメ(一種のステレオタイプ)が、いかに多くの場面で認められるかを見てみましょう。絵本に限らず、漫画・コミック、参考書など、絵が利用される出版物であれば、「人種」デフォルメは至る所で用いられていたといっても過言ではありません。私たちは、無意識のうちに「人種」による格差を受け入れ、自ら偏見と差別を再生産する過程に関わってきたということでしょう。一方の人々を「下」に蔑んで見るということは、他方の人々を「上」に崇めて見ることを意味します。このことは、欧米文化・世界観と「白人」に対する接し方を、アジア文化・世界観と「有色人」に対するそれらと比較すると明らかです(1)。

そこで、世界中で広く親しまれてきた児童書をとりあげて、「人種」デフォルメの広がりステレオタイプ・偏見の存在を、文化・世界観の影響という枠組みから検討してみます。

「人種ステレオタイプ」の浸透 「ちびくろさんぼ」の絶版は、「人種」ステレオタイプが、私たちの心の深層に根ざしたものであることを、はからずも示していたのではないのでしょうか。「人種」デフォルメされた挿絵が、人々の前から取り払われたとしても、それは人種偏見・差別の減少に直結することを保証するものではなく、一時的で表層的な対応といわざるをえません。「さんぼ」が大衆の目の前から姿を消したとしても、私たちの心に刻み込まれた心象、イメージは、容易には消し去られず、「人種観」の歪みを短期間にたやすく修正するほどの絶対的な力をもつものではありません。「人種」デフォルメはそれほどに大衆化し、私たち日本人の「常識」になり、それらが偏見・差別につながろうとは、誰もが 思いもしなかったのです。教科書の挿絵の「人種」デフォルメが問題として指摘されたことを報じる新聞記事(2)があります。「アフリカ系アメリカ人(黒人)にしては唇が厚すぎる」との文部科学省の修正要求に、出版社は「唇を薄くしたり、顔を細くしたりするなどの修正をした」。教科書に掲載される資料は、子どもの種々の判断力形成に際して「基準」を提供する一つの重要な材料です。子どもに及ぼすその影響力は大きいものです。実際には、教科書に限らず、子ども向けの「児童用図書」でも「人種」デフォルメは多用されてきました。

かつての「ちびくろさんぼ」問題もそうでしたが、海外からの指摘(外圧)があつて初めて日本国内で問題が認識されました。ずっと以前から国際的に議論されてきた問題であるにもかかわらずです。日本人の間に広く共有されている「人種」ステレオタイプやデフォルメの原型は、1800年代に欧米から「輸入」されたと考えられることは今回は触れません。ここでは、教育・教科書の「人種」デフォルメと関わりの深い児童書を例に、再度「人種」デフォルメの原型が欧米で形成され、日本で再生産されてきたことを確認しておきたいと思います。

ドリトル先生と「人種ステレオタイプ」 図1は、「ドリトル先生アフリカ行き」です(3)。原作と挿絵は、1920年(大正9年)に描かれており、現代とは時代背景がまったく異なっていることを、まず認識しておかなければなりません。心やさしく無類の動物好きのドリトル先生。ある日先生のもとにアフリカでサルが蔓延し、救助を待っている、との知らせが舞い込みました。動物話がわかり、名医のドリトル先生は、仲好しの動物たちを連れ、アフリカ行きを決意しました。難局を切り抜けサルの国にたどり着いたドリトル先生は、早速治療に取りかかりました。が、人手(動物手)が足りず、看護を手伝ってくれる動物を募りました。支援の依頼を受けた百獣の

王ライオンは、先生の頼みを軽くあしらいますが、名医ドリトルの名声を知る妻に厳しくなじられます。「その先生のところへ、早く行ってらっしゃい。あやまってくるのです。…そのかたのいいつけどおりなんでもやってくるんです。黒人みたいに働くんですよ」(3, pp.73-74)。妻のことばには、



図1 ドリトル先生アフリカ行き
(ヒュー・ロフティング1962)



図2 ドリトル先生の郵便局
(ヒュー・ロフティング,1963)



図3 ドリトル先生の郵便局
(ヒュー・ロフティング,1963)

労働力提供者の例として、「下級」市民としての「黒人」が登場しています。

王子の悩み ジョキリン王国の黒い王子には悩みがありました(3, pp.93-111)。王子の嘆きは、作品が描かれた当時の世界の白人優位の有様をそのまま描写しているのです。「ポリネシア(オウム)とチーチー(サル)は、静かにして、じっと王子を見ていました。しばらくすると、王子は本をおいて、もの憂いため息をつきました。『ああ、ぼくが顔の白い人間だったらなあ。』と夢みるように、遠いところへ目をそそいで、王子はいいました。そのときです。ポリネシアは、少女のような細い高い声で申しました。『バンボさま、あなたの顔を、白くしてくださいませんか？』」黒い肌を嫌うバンボ王子である。「…バンボ王子は喜びのあまり、両手をにぎりしめて、さげびました。『わたしを白くしてくださいのは、どなたでございましょう。』…『そのかた(ドリトル先生)のところへ、そっと忍んでいらっしゃいませ。ただちに、あなたのお顔は白い顔の若者にもまさせて、白くおなりでございましょう！』…ほほえみを浮かべて、椅子にもたれ、王子は日の暮れるのをまちました」。黒い肌をいまわしく思い、白い肌へ憧れる心をバンボ王子が象徴的に表現しています。

バンボ王子は、黒い肌がわが身の不幸を招いているとドリトル先生に告白しています。「色の白いあなたさま、わたしは不幸な人間でございませう」。本で読んだ「眠り姫」を探しにでた王子は、ようやく眠っている姫を見つけました。姫の反応は衝撃的でした。「私の顔を見ると、『まあ、黒んぼだわ！』といって逃げてゆきました」。悲嘆に暮れる王子は、「私の色を白くして、もう一度、また眠り姫を探しにゆけるようにしてくださいませ。」と哀願します。ドリトル先生の応答は、日本人の「白人」志向に共通する内容を含んでいます。「若人よ！…あなたの髪の毛を美しい金髪にしてさしあげるとしたら、…まずそのくらいのところで、御満足を願えないものかな？」。王子の答えもまた人種偏見・差別に曝される側にとっても「肌の色」の意味を象徴的に表しています。「いえ、…顔が白くならなかったら、ほかのことをなんとしても、みんなだめなんです。私は、色の白い王子にならなければなりません」。白い肌が最高・至高のこととされているのです。

王子は、顔を白くする薬品を調合した「金だらい」に顔をつけ、白い顔に変身しました。「ようやく王子は、金だらいから顔をあげ、苦しそうな吐息をつきました。動物たちは、その顔を見て、みんな一度に驚嘆の声をあげました。王子の顔は、まるで雪のようにまっ白でした。そして、どろ

色であった目も、きりりとした灰色にかわっていました。…王子は喜びのあまり、大声をあげて牢屋じゅうをとびまわりました」。ヒュー・ロフティングが、ドリトル先生とアヒルのダブダブの次の会話で、「人は見た目ではない」ことを諭しているのが救いです。「『いくら白くなったって、眠り姫はお嫁にきてくれないでしょうよ。』と、ダブダブがいいました。『なんだか、もとの黒いほうが良かったような気がしますね。でもま、いずれにしても、美男子というわけにはいかないようですね。』『しかし、善良な子どもだよ。』と、先生はいいました。それは、いくぶんか夢見がちなところはある。一だが確かにりっぱな人間じゃ。“みめよりこころ”というじゃないか」。内面の大切さをドリトル先生は諭しています。

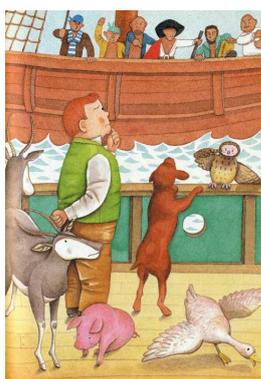


図4 ドリトル先生物語
(ヒュー・ロフティング, 1989)

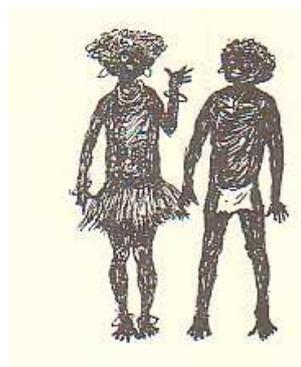


図5 「ピッピ南の島へ」
(アストリッド・リンドグレーン, 1965)

デフォルメの共通性と描写の変化 図2は「ドリトル先生の郵便局」(4)です。1923年に書かれ、日本では1963年に翻訳・出版されました。ドリトル先生が、西アフリカへ船旅に出かけたときのお話です。奴隷制は廃止され過去のものになっていましたが、ファンティボ王国の奴隷の密売買が物語に盛り込まれています。ファンティボ王国のココ王が郵便局の窓口に顔を見せたところ。図3は、ココ王が、ドリトル先生が、港に丸木船で帰ってくるのを見ているところです。いずれも「人種」デフォルメが認められます。全12巻の子ども向けの楽しい読み物であり、挿絵も世界中で子どもから大人まで広く受け入れられ、違和感を与えるものではありませんでした。

図4は、同じドリトル先生の物語(5)ですが、「人種」デフォルメが社会問題化した後の出版です。ここにはバンボ王子の「白い肌」への変身願望は出てきませんし、「人種」デフォルメされた挿絵は含まれていません。次項で触れる描写の変化が認められます。

図5は、アストリッド・リンドグレーンが1948年に著した「ピッピ南の島へ」(6)です。日本に紹介されたのは1965年でした。ピッピたちの乗ったホッペトツサ号は、クレクレドット島に入港しました。その島は、ピッピの父エフムライが船で漂着した「黒人島」です。エフムライは、ピッピたちとの遊びの中で、最初に会った島の人々をこう紹介しています。「あの連中ははじめは、わしを食っちゃまおうと思ってたよ…」(6, pp.115-128)と。

「ピッピ船にのる」(7)の巻で、ピッピは父エフムライとクレクレドット島を訪れます。島の生活で、黒い肌に憧れるピッピも紹介されています。「黒人のお姫様よ！…耳には、両方とも耳輪をはめて、鼻には、それよりちょっと大きな輪をはめるのよ。…パンくずひとつだって、つけやしないわ！でも、わたし、おつきの黒人をひとりきめといて、まい朝、からだじゅうを、靴ずみでみがいてもらおう。そうしてほかの黒人とおなじくらいに黒くなるのよ。わたしは夕がたになったら、靴とい

つしよに、自分をみがきにだせばいいのよ」(7 p.207.)。島の子ども肌の黒さが、「靴墨」の黒さを引き合いに出して「リアル」に表現されているところが象徴的です。

父エフムライ王の紹介は、自然と共存した時代の、おおらかな住民の生活を想像させる描写になっています。「エフムライ王は、威風堂々と玉座に座をしめました。王さまは、もうコール天の服はぬぎすてて、王さまらしいでたちをしていました。つまり、頭に冠をかぶり、腰には木の皮の腰みのをまきつけ、サメの歯でつくった首飾りを首にかけ足首にはふとい輪をはめていたのです」。素朴な子どもたちの姿と彼らの思いが書かれています。「小さな、黒いクレクレドットの子たちはピッピの玉座にちかよってきました。どういうわけだかわかりませんが、この子たちは、白い肌のほうが黒い肌よりよりずっときれいなような気がしていました。それで、みんなは、ピッピとミーとアンニカに近づくにつれて、なんだか、おそれおおい気になってくるのです」(6, pp. 120-124)。わけへだてなく天真爛漫に遊ぶ子どもたち。「白い子も黒い子も、子どもたちはみんな、身につけていたものをぬぎすてて、どなったり。わらったりしながら、水にとびこみました」。肌の白いピッピたちは、島の子の黒い肌を羨望しました。「水浴びをしたあと、みんなは白い砂浜でころげまわりましたが、ピッピとミーとアンニカは、皮ふの黒いほうがずっといいと、意見が一致しました。というのは、黒地に白い砂がかかると、とてもゆかいにみえるのです」。好奇心にみちた子どもが元気いっぱい躍動している姿が目につかびます(6, p.139)。



図6 「長くつ下のピッピ」
(.アストリッド・ リンドグレーン, 1965)

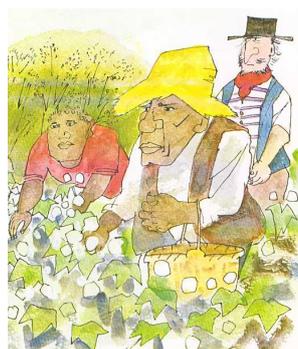


図7 「アंकルトムの小屋」
(ストー, 1983)

ところで、原作の挿絵を見てみましょう(図5)。文章の記述とは対照的に、白い子と黒い子の描かれ方には大きな違いがあります。肌の黒い子は、真っ黒な肌、まん丸い目、「ちりちりの縮毛」、真っ白い口、が強調して描写され、「人種」デフォルメされています。

アストリッド・ リンドグレーンの三部作の最初の作品は「長くつ下のピッピ」(8)であり、1945年にスウェーデンで出版されました。図6は、1998年に出版された「長くつ下のピッピ」(9)ですが、ここでは原作の挿絵に見られた「人種」デフォルメは認められません。図7は、ストー(ハリエット・エリザベス・ピーチャー・ストー)原作のよく知られた「アंकルトムの小屋」(10)です。作品は、1851年から1852年に連載された黒人奴隷の物語です。ここに引用した本は1983年に刊行され、アंकルトムをはじめ「黒人」は全体的に写實的に描かれ、自然な表情・容姿になっています。「黒人」の唇は、他の人々に比べ厚く描かれていますが、それはデフォルメではなく、現実にある人々の特徴を客観的に描写していると理解できます。かつて挿絵に見られた「人種」デフォルメとステレオタイプは、今や姿を消しました。他の多くの本でも、人々の外見の違いは、それぞれの個性・特徴として描かれる時代になっているのです。

おわりに 図8、9、10は、スウェーデンのソールナ市のパンパ(Pumpa)の就学前教育施設を訪れたときの写真(2007)です。園には健常児と共に知的障害をもつ子どもが通園しており、感覚教育やことばの学習など子どもの特性とニーズに応じた教育が施されていました。社会心理学の視点から興味深かったのは、子どもが遊んだり、教育を受けたりする部屋に教具(遊具)として揃えられた人形です。



図8 幼稚園のお遊び人形(1)
(スウェーデン;坂西, 2007)



図9 幼稚園のお遊び人形(2)
(スウェーデン;坂西, 2007)



図10 リアルな人形
(スウェーデン;坂西, 2007)

人形の置かれている部屋はいくつかありましたが、「白い肌」の子どもの人形もあれば、「黒い肌」の子どもの人形も置かれていました(図8, 9)。さらに図10は、「肌の黒い」男の子の人形で、子どもの姿そのもので、性器もリアルにつくられているのが印象的でした。そもそも「白い肌」や「黒い肌」を区別して気にかけること自体が、ステレオタイプの反応であることは明らかです。園にはいろいろな「肌の色」の子どもが生活しています。私たちが訪問しているときにも、いろいろな「肌の色」のお母さんが先生と話をしている姿を見かけました。多文化共生の現実に配慮し、人々の多様性を前提にした遊具・教具が、保育・教育施設に配置されているのです。

「人種ステレオタイプ」が如何に深く私たちに浸透しているかは、簡単な実験で確認できます。「ちびくろさんぼ」(11, 岩波書店)のストーリーのみを朗読(録音を提示)し学生に聞かせます。聞き終わったら、学生に挿絵画家として各自がイメージした「さんぼ」を自由に描画してもらいます。半数近くの学生は、「厚唇」「真ん丸目」の「デフォルメ」した「さんぼ」を描きます。さらに、既刊の三種の「さんぼ」の挿絵(A-岩波書店(11)・人種デフォルメ有, B-ヘレン・バナマン原画(12)・人種デフォルメ無, C-子ども文庫の会(13)・人種デフォルメ無)から、ストーリーに合うものを選ばせます。6, 7割の学生は、Aを親しみがあり、可愛く、ユーモアのあるキャラクターとして選択します。多くの学生は、「ちびくろさんぼ」を見たり読んだりしたことはないにもかかわらず、片寄った好みを示すのです。いろいろなステレオタイプが、私たちの意識に潜在することを自覚し、自らの目と頭脳を用いて考えることを改めて大切にしたいと思います。

引用文献

- (1)坂西友秀 (2005) 近代日本における人種・民族ステレオタイプと偏見の形成過程多 賀出版
 - (2)朝日新聞 2003年4月9日 唇薄く黒人挿絵を修正
 - (3)ヒュー・ロフティング (1962) ドトル先生アフリカゆき(井伏鱒二訳) 岩波書店 (Hugh Lofting 1920 THE STORY OF DOCTOR DOLITTLE)
 - (4)ヒュー・ロフティング (1963) ドトル先生の郵便局(井伏鱒二訳) 岩波書店 (Hugh Lofting 1923 DOCTOR DOLITTLES POST OFFICE)
-

-
- (5)ヒュー・ロフティング (1989) ドトル先生物語(神鳥統夫文・景山ひとみ絵) ポプラ社
(6)アストリッド・リンドグレーン (1965) ピッピ南の島へ (大塚雄三訳) 岩波書店 (Astrid Lindgren 1948 PIPI LANGSTRUMP SODERHAVET, Raben & Sjogren, Stockholm)
(7)アストリッド・リンドグレーン (1965) ピッピ船にのる (大塚雄三訳) 岩波書店 (Astrid Lindgren 1946 PIPI LANGSTRUMP SODERHAVET, Raben & Sjogren, Stockholm)
(8)アストリッド・リンドグレーン (1964) 長くつ下のピッピ (大塚雄三訳) 岩波書店 (Astrid Lindgren 1945 PIPI LANGSTRUMP SODERHAVET, Raben & Sjogren, Stockholm)
(9)アストリッド・リンドグレーン (1998) 長くつ下のピッピ (谷登志雄脚本/フランク・ニッセン キャラクター・デザイン) 金の星社 (Astrid Lindgren 1964 Pippi Longstocking AB Svensk Filmindustri Iduna Film Produktionsgesellschaft GmbH & Nelvana)
(10)ストーリー(ハリイェット・ピー・チャー・スト)(1983) アンクルトムの小屋(香川茂訳・赤星亮衛絵) ぎょうせい
(11)ヘレン・バナマン (1953) ちびくろ・さんぼ 岩波書店
(12)ヘレン・バナマン (1994)(山本まつよ訳・阪西明子絵) ブラック・サンボくん 子ども文庫の会
(13)へれん・ばんなーまん (1999) ちびくろさんぼのおはなし(なだもと まさひさ訳) 径書房 (Helen Bannerman. The Story of Little Black Ambo Ragged Bears Ltd.)
-

2012年度 第2回埼玉大学図書館会議報告

2012年度 (平成24) 第2回埼玉大学図書館会議を下記の要領で開催いたしました。

- 1 日時: 2012年10月29日 (月) 15時00分～16時05分
- 2 場所: 図書館1階会議室
- 3 議題
 1. 報告事項
 - ・ WestlawInternationalのトライアルについて
 - ・ 電子ジャーナルTaylor & Francis SSH Libraryの導入について
 - ・ SciFinder無制限アクセスプランの提案について
 - ・ Web of Scienceに分野等を追加する場合の所要額について
 - ・ その他
 2. 協議事項
 - ・ 2013年外国雑誌購読希望調査に基づく購入計画について
 - ・ 平成24年度学生用図書部局推薦に基づく購入計画について
 - ・ 平成25年度購読国内雑誌の選定手順について
 - ・ 平成24年度高額図書の推薦について
 - ・ その他

第3回埼玉大学図書館会議報告

2012年度（平成24年度）第3回埼玉大学図書館会議を下記の要領で開催しました。

日時：平成25年 2月7日（月） 13：30～15：00

場所：図書館会議室

○ 前回議事要録の確認

議事

（報告事項）

- 1 図書館入退館管理システムの導入について
- 2 その他

（協議事項）

- 1 国立大学法人埼玉大学図書館利用細則の一部改正について
- 2 平成25年度国内雑誌購読希望調査に基づく購入計画について
- 3 平成24年度高額図書推薦に基づく購入計画について
- 4 平成25年度SciFinderの契約プランについて
- 5 平成25年度Web of Knowledgeの契約コンテンツについて
- 6 その他

（その他）

図書館からの お知らせとお願い

図書館への入館と
利用方法が変わります。
2013年4月1日からです。

新入館システム

図書館への入館と
利用には、みなさんの
学生証か図書館利用証が
必要になります。教職員の方は、
図書館利用証（バーコード付き）
が必要になります。

返却期限が過ぎた
図書館の本はありませんか？
返却期限の御確認をお願いします。

図書返却のお願い

図書は大学の
大切な財産
です。

教員、学生のみなさん！
よろしくお願いいたします！